

ベートーヴェン 秘められた思い

田幸正邦



昨年、大晦日から元旦にかけて、東京文化会館でベートーヴェン作曲の交響曲(九曲)の連続演奏会があった(指揮、NHK交響楽団、九時開演)。一つの交響楽団が連続して演奏したのは日本のみならず世界でも最初である。ここで、N響の団員の皆様に指揮者に敬意を表したい。

ところで、今年はベートーヴェンの多くの作品が全国で演奏される。その中で、フランスのナントで毎年開催される音楽祭「ラ・フォル・ジュルネ」が東京に移動し、約千人の国内外の芸術家によってベートーヴェンの全交響曲、ピアノ・ソナタ、ヴァイオリン・ソナタ、チェロ・ソナタ、弦楽四重奏曲、そのほかの曲が演奏される(四日二

十九日、十五日、東京国際フォーラム)。沖縄県でも、ベートーヴェンの作品が数多く演奏されることを希望して、前述の演奏会でも最も強い印象を受けた交響曲第八と四番に秘められた彼の思いや姿を紹介したい。この二つの交響曲は、指揮者と主催者の三枝成彰氏(作曲家)が、休憩時間には私たちに力説していただいたものである。

私は、交響曲第八番はベートーヴェンが他界(一八二七年)した翌日(三月二十七日)に発見された不滅の恋人に宛てた三種の手紙と密接に関連することを解説している。従っ

て、不滅の恋人はいまだに特定されていない。この証拠をベートーヴェンは作品に残してあると洞察した。

第一楽章は再会の喜びと親密な語らいを象徴している。第二楽章(変奏)は恋人と再び会う約束の地に馬車で向かふさまを描いている。この楽章は、描写音楽の極めつけである。第三楽章は約束の地に到着したもので

交響曲第4番に答え

「不滅の恋人」はヨゼフィーネ

の「恋人」再会するところが、目を見張るほどに興味があきらかに変わる心情を吐露したものである。第四楽章は恋人に逢えない無念の情と衝動から憤りに激発する心情を象徴している。

このような解釈は「不滅の恋人」に宛てた手紙を読むことによつて初めて可能になった。しかしながら誰に宛てたものなのか、依然不明である。私は、交響曲第四番にその答えが秘められていると洞察した。この交響曲は、一八〇六年に完成されたもので、ヨゼフィーネ・タイム未亡人がベートーヴェンの心算独

占していたことである。第一楽章(変奏)は、女性の躍動感あふれる人間像を象徴した極めつけの曲で、初々しくはち切れんばかりの若さと美しさを発散させている。第二楽章はヨゼフィーネの波打つ心臓の鼓動が聴こえるほどの、彼女の一体感を象徴したものである。第三楽章(変奏)は波のように舞る思いを、ヨゼフィーネにどう伝えたらよいものか悩むベートーヴェンに、彼女が優しく、愛らしく微笑みながら話しかけさまを描いている。

第四楽章(変奏)は、夢に帰ったヨゼフィーネに懐いた気持ちと愛を、耐えることができず、とうとう馬車を彼女の元に疾風の如く向かうさまを描いている。この楽章も、描写音楽の極めつけである。

ベートーヴェンは、一八二二年七月九日にボヘミア・プラハに滞在し、第八番交響曲を作曲している時に、以前(一八〇六年)ヨゼフィーネに逢いたい一心で彼女の住む地「マルクトン・シャル・ハンガリ」に馬車を走らせた記憶が鮮明に浮かび上がったであろう。この交響曲の第三楽章に、交響曲第四番の四楽章の手法を導入し、同じ変奏長調、二四拍子のソナタ形式で構成して馬車を描写することによって、手紙の宛名「不滅の恋人」を特定する証拠としたのである。

ベートーヴェンはこのように自身の思いや姿を多くの作品に纏結している。ベートーヴェンの作品から、彼の思いや姿を知ることによって、私たちは生き生きとした姿を知ることができ、前記の音楽祭を楽しみとしている一人である。

(琉球大学文学部教授)